

「わたしの^{だいとうあ}大東亜戦争」

鈴木明子

現在80^{さい}歳。三重県^つ津市に引越したのは国民学校5年（昭和19年）、10^{さい}歳の時だった。6年の夏休みに入って間もない7月24日正午少し前に本格的な^{くうしゅう}空襲が始まった。

暑い日だった。雨もしばらく降らず土ぼこりが^ま舞いあがっていた。
^{けいかい}警戒警報が鳴ってすぐに^{くうしゅう}空襲警報が鳴ったので、今日は変だねとい
いながら家族で^{ぼうくうごう}防空壕にとびこんだ。「ぐわん」という音がして真っ
暗になる。生き^う埋めになったかと思いそのままじっとしているとま
わりが明るくなる。土ぼこりで真っ暗になったのだ。すぐに2回目
の^{ばくだん}爆弾が落とされる。3回4回と上空を^{せんかい}旋回しながら投下している。
飛行機（B29）の^{ばくおん}爆音と^{ちやくだん}着弾の音とその後^こにやってくる真っ暗な
時間、本当に^{きょうふ}恐怖の時間だった。永久に続くかと思った^{ばくげき}爆撃も気が
つく^こと終わっていた。

不気味な静けさの中でぱちぱちと物のはぜる音がし、^こ焦げくさい
^{にお}臭いがただよってくる。^に逃げなくちゃと立ち上がると^{ぼうくうごう}防空壕の屋根
はなくなっていて遠くのほうまでずっと見通せる。郵便局も津^つ新町

の駅も県庁の建物も見える。その間にあった家が全部吹き飛ばされたり倒壊したりしたのだった。我が家も屋根はなくなり柱も折れて畳さえなくなっていた。ここには焼け死んでしまうと山のほうに歩き始めた。

道は板や瓦やコンクリートの破片で足の踏み場もない。妹が何かに足をとられてすべってしまった。よくみるとそれは死体から飛び出ている腸の一部である。気がつくあたりにはねじれた死体や人間の形をとどめない死体や腕や足など身体の一部が転がっている。爆弾の直撃を受けたものや爆風で飛ばされたものだ。母が顔を血だらけにしている。怪我をしたはずはないと思って見廻すと、木の枝にひっかかって血が滴っている死体に顔があたったのだ。

気持ち悪いも怖いも悲しいもない。一切の感情がなくなって、ただその場所から少しでも遠ざかりたい思いでいっぱいだった。山の方へ少し行くと国防婦人会の人達がにぎりめしを渡してくれたが食欲は全くない。それより水が飲みたいと井戸へ連れていってもらい、水を飲むと生き返った思いだった。

その時低空飛行をしてきた戦闘機(P51)が機銃掃射を始めた。操縦士の顔がはっきり見えた。何がおこるかわかっていても体が冷

たくなって動くことができない。私の右側の2メートル位の所を

銃弾じゅうだんがプスプスと穴をあけていった。飛行機が去ってしまっても、動くことができない。しばらくたっても口をきくこともできない。

次の日、父方の叔父夫婦おじに会い、焼け残った叔父おじの家に行く。

4日後の7月28日、再び焼夷弾しょういだんの投下を受けた。29日の切符きっぷが手に入ったからと、母の実家に行く準備をしていた矢先だった。

夜中近く空襲警報くうしゅうのサイレンに外に出てみると、空一面に照明弾だんが広がって昼間のような明るさだった。「うわぁきれい」と見上げてみると、いきなりガワガワガワという音と共に油脂焼夷弾ゆししょういだんが投下された。

焼夷弾しょういだんでは、防空壕ぼうくうごうに入っているのは焼け死んでしまうと田んぼの中の道を走り出す。叔父たちとも離れてしまい、道もわからずただやみくもに走った。一発だけ仲間はずれになった焼夷弾しょういだんが一步踏みだした私の左足にあたった。痛いのか痛くないのかもわからなかったが突然歩けなくなってしまった。

母は私を田んぼの中へ突き落とす。家族と田んぼの隅すみに蹲うずくまっていると、焼夷弾しょういだんのせいで田んぼの水がだんだん温まってくる。そして熱くなる。目の前へびを蛇や蛙かえるがからだをくねらせながら白い腹をみ

せて流れていく。熱さに我慢できなくなって隣の田んぼに移るとす
こし熱さを逃れることができた。海岸の重油タンクに火が入って
爆発し、あたりは更に明るくなった。

夜があけて叔父の家に行こうとするが、一面の焼野原でどの方向
に歩いたらいいか見当もつかない。ぼんやりと座っていると叔父が
やって来た。「丸焼けになってしまった。何も持ちだせなかったけど
無事でよかった」といい叔父の家に行くことにする。「あれ、母さん
私歩けないよ」夜の間は足をやられたのは夢だと思っていたがそれ
は本当のことだった。膝から下がまったく力が入らない。立とうと
しても立てない、痛くはないのに涙がでてしまう。叔父が半分焼け
たシーツを持ってきて、この上に乗れという。這ってそこに横にな
るとずるずると焼け跡を家まで引っ張って行かれた。

そこへ消防団の人が5・6人担架を持って、怪我人はいないかと
いいながらやってくる。ここにひとりいますというと、筵を敷いた
担架に乗せられ県庁の裏にある日赤の防空壕につれていくといわれ
すぐに運ばれてしまった。

行った先は土の上に戸板を並べただけの場所で、山に横穴を掘っ
たのだからじめじめとしている。その中で十燭光位の電灯がいくつ

かぶらさがっているのが何とも陰気な感じを受ける。垂れ流しだから臭いもひどい。戸板の上にはにぎりめしがおいてあるが誰も食べていない。戸板のまま外へつれだされる人もいる。あつまた死んだね、患者たちがひそひそと話している。傷を負った人は誰ひとりとして治療らしい治療を受けていない。傷には蠅がたかり、太った蛆虫が傷にもぐりこもうとしている。誰も大声をださない。泣く人もいない。時々弱い呻き声が聞こえる。私はいつの間にか眠ってしまった。

「これから病院を変わるから起きなさい」と父の声が聞こえた。

「何日ここで寝てたの」と聞くと「今日は7月30日だから二晩かな」といわれる。ここで二晩も過ごしてしまったのかと思うが余り実感がない。新しい戸板と筵と布団がリヤカーの上へのせられていた。

薄暗い所からいきなり太陽の照りつける外に連れだされて目もあけられない。眩しいだろうと黒いこうもり傘をさしかけてもらう。田んぼの中の曲がりくねった細い道をリヤカーが進む。途中戦闘機が急降下してくる。リヤカーをひいた男達はそばの木陰に逃げこむが、私はリヤカーに乗ったまま身動きできない。飛行機が行ってし

まうと「嬢^{じょう}ちゃんごめんな」といってもどってくる。そんな事を3回ほど繰^くり返し、津^つから10キロほど南^かの香良洲^{らす}の病院についたのは午後3時過ぎだった。母と妹達はもう到着^{とうちやく}していた。たった2日しかたっていないのに長い間^{はな}離れていた気がして涙^{なみだ}がでてきた。

ここでも十分な治療^{ちりょう}は受けられなかった。手術はできないといわれ、そのまま左足をギブスで固められた。3帖^{じょう}ほどの部屋で家族4人の生活が始まった。七輪^{なべ}、鍋^{ちやわん}、茶碗^{はし}、皿^{はし}、箸^{はし}、ちゃぶ台等を周囲の人からもらって、久しぶりに豊かさを味わい、生活も落ち着いた。雑音まじりでよく聞こえず、意味もわからない「8月15日の玉音放送」を聞いたのもそこだった。

8月中に病院は閉鎖^{へいさ}され強制退院となり家にもどったがしばらくは歩くこともできなかった。松葉杖^{つえ}をついて歩く練習をし、10月になって学校に通うことができるようになった。

それから30年、40代は足が痛むとなだめながら痛みとつき合ってきたが、今はなだめてもなかなかいうことをきいてくれなくなってしまった。

今になって手術をすすめられている。

(平成18年3月記)